



「百周年記念ミス・ブラジル日本」
大塚橋ホールにて



ミスコンテストで
優勝したアドリアーナ



デザイナー Linda K. による
ファッションショー



両親とコンテストの優勝でもらった車の前で

外国人 と生きる

「ハーフ」であることに誇りをもつ、
100年に一人の「ミス・ブラジル日本」

アンジェロ・イシ

武蔵大学准教授

望まれる東洋系ハーフ

二〇〇八年は日本からブラジルに最初の移民船が渡ってちょうど一〇〇年になる。この移民一〇〇周年を記念して、出港地の神戸と横浜では、さまざまな記念イベントがおこなわれてきた。そのひとつが、横浜の大塚橋ホールで五月三日に開催された「百周年記念ミス・ブラジル日本」である。このコンテストには日本全国から約七〇人が応募し、優勝者への副賞として新車一台が贈られた。そして、そのミスに輝いたのは、日系三世のアドリアーナ・ラヴィーネ・イナガキである。

アドリアーナはブラジルの最南部、リオグランデドスール州出身。同州はもっとも多くの世界的トップモデルを輩出する「美人の地」として知られ、ファッション界の女王とさえ言われるジゼル出身地としても有名である。当地の若い女性たちが一度はモデルを夢見るのは当然のことでもある。じつはアドリアーナより一歳年上の姉、イアーナも、早くからモデルとしてのキャリアを実現しようと、積極的にオーディションを受けていたほどだ。当時ちょっと太っていたので、自分もモデルになれるとは思えなかったというアドリアーナにとってもそれは大きな夢であった。

アドリアーナの父親はブラジルでは電話会社の事務所に勤務していた。しかし家計事情は思わしくなく、日本へのデカセギを決心した。当初両親だけが来日し

て、娘たちはブラジルで勉強を続けさせる計画だったが、どうしても親に泣きついた二人は結局、ともに来日することになった。二〇〇五年のことであった。

来日後、姉妹は工場でも少し働いたが、日本にもブラジル人学校があることを知り、入学した。学校のレベルに不満で二度も転校したが、二〇〇七年、無事にブラジル人の高校を卒業した。公文式の塾にも通い、日本語の勉強にも力をいれた。

アドリアーナは父親が日系人で、いわゆる「メスチーサ」（混血児）である。日本では、その外見のため、コンビニや電車のなかで幾度か冷たい視線を浴びた。しかし、笑顔が消えなかったのは、日本人と違う顔をしていることが、一方で肯定的に評価される社会でもあったからだ。彼女いわく、自分は背が高くないのでブラジルではあまり目立たなかったが、ここでは「東洋系のハーフ」であることがモデル業界でも望まれる存在であった。

最初に転機を迎えたのは姉のイアーナだった。彼女は二〇〇六年、在日ブラジル人の二大ミスコンテストのひとつである「ミス・ニッケイ」でいきなり優勝し、モデルとして働き始めた。アドリアーナはバルバラ・ナカツガサというプロモーターが手がけた「ミス・ブラジル日本」に応募し、予選を通過した時点でさっそくある事務所から声がかかり、モデルとしてデビューできた。そして今回のコンテストでの優勝はきっと彼女に飛躍の機会をもたらすだろう。

モデルは一握り

それにしても、何故、三〇万人を超える在日ブラジル人社会において、これほどまでに美人コンテストが盛り上がるのだろうか。それは、何よりもまず、ブラジル出身の日系人女性たちにとっては、モデル業こそが、日本人との差異がプラス評価になる数少ない業界であるからだ。世界でも有数のセレブリティになったジゼルの成功物語が、多くの少女やその保護者たちを刺激していることはいまでもない。しかし、第二のジゼルを目指す人がこれだけ多いのは、それだけ日本での進学の可能性に寄せる期待が低いということの裏返しだとも言える。

わたしはブラジル出身者に向けた講演や執筆活動のなかで、「モデルになれるのはごく一握りの人だから、きちんと勉強もしましょう」との主張を重ねてきた。アドリアーナの話を聞いて感心したのは、彼女がモデルとして順調な滑り出しを遂げているにもかかわらず、勉強に対する意欲を失っていないことである。彼女は日本語をもっと勉強して、日本の大学でエッセイリズムを勉強するという選択肢も考えたことがある。現時点では、ブラジルを拠点とする通信制の大学で経営学か教育学を勉強することになりそうだが、遠隔教育を実施する複数のブラジルの大学が日本に進出しており、在日ブラジル人のあいだで大きな注目を集めている。

カラオケからコンテストへ

ミスコンテスト全盛期を理解するためのもうひとつのキーワードは、日本におけるブラジル系エスニックビジネスの成熟である。ミスコンテストでは毎回、新車などの豪華賞品を提供する数十のスポンサーの企業名が延々とあげられる。それだけ力のあるスポンサーが存在しなければ、このような大規模なイベントは実現できるはずがない。じつは、一九九〇年代をとおり、同じく一等賞に新車を提供し話題を集めてきたのが、在日ブラジル人のいわゆる「のど自慢」、カラオケ大会であった。移民の第一世代が主役であったカラオケに代わって、移民の第二世代が主役であるミスコンテストがコミュニティでもっとも注目されるイベントに発展したことは、移民社会の変貌を象徴しているともいえる。

アドリアーナの晴れ舞台となったファッションショーは、日本に根を下ろしたブラジル人デザイナー、Linda K. のデザインによるものであった。モデルたちはそこで美貌を披露すると同時に、「あなたは移民一〇〇周年についてどう思いますか？」という質問で知性が試された。アドリアーナの答えは次のようなものであった。「日本からブラジルに渡った祖父母の頑張りこそが、今のわたしにインスピレーションを与えてくれている」。

優勝を手にした五月三日は、奇しくも彼女の十七歳の誕生日でもあった。